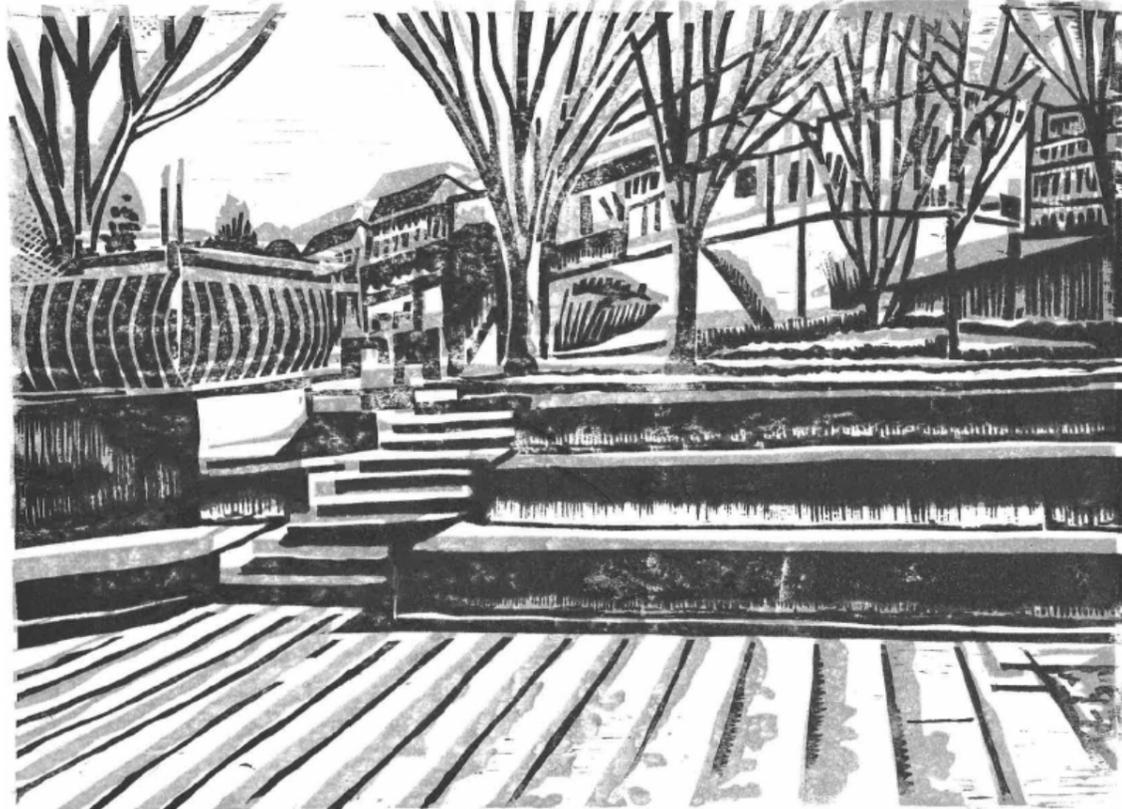


いたちかわらばん

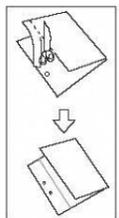
通刊 76 号 鮎川・狹川 / 川原番・瓦版 '17夏号



【版画 宗森英夫】

日東橋、枕木だんだん広場

この部分を切り取ってファイルにすると便利です



ハナミズキの記

上の版画は、いたち川の左岸、日東橋の下流側から眺めた風景である。このまま道路を横断して左岸沿いの道を進めば綺麗な紅い橋、扇橋にたどり着き橋を渡れば六反町公園に入っていく。

この版書の左側、日東橋の右岸側たもとに高さ3メートルほどの小さなハナミズキが立っている。いたち川沿いを散歩道とする自分にとってこの木は大好きな木である。ハナミズキと言えば山下公園にある大ぶりの樹が有名だ。何しろ氷川丸を背景に従えてピンク色の花を見せるあの樹は公園を彩るプリマミたいなものだから。

ハナミズキは、北アメリカ東部原産の花木で、明治の末、東京都から贈ったサクラの返礼としてアメリカから苗木30本が贈られてきた話は有名である。ちなみにハナミズキはアメリカの国花である。別名をアメリカヤマボウシと呼ぶ。(注) 落葉高木で花木として広く各地に植栽されている。5月頃、花弁状をした大きい4片の総苞片(そうほうへん)が白色または紅色になって花弁のように美しい。

今年の花はもう散ってしまったが秋の紅葉も良いのでご覧になるとよい。

栄区には、シドモア桜もあることだから、桜と対比されるハナミズキのことを知っておくことも大切と思記した。(ピンテール)

(注) ハナミズキを「アメリカハナミズキ」と呼ぶ人もいるが、これはハナミズキとアメリカヤマボウシを混同したと思う。

栄区「オープンガーデン 花めぐりツアー」 ～いたち川沿いの春の草花～

5月19日/20日、第33回全国都市緑化よこはまフェアに合わせ、栄区では初めての企画として「オープンガーデン花めぐりツアー」が開催されました。

これまで、区内でのオープンガーデンは、湘南桂台エリアや庄戸エリアなどで個人宅の庭を開放する形で実施されて来ました。今回は、栄区内の花壇/庭/花の名所/街区公園/いたち川の草花まで、この機会に栄区を楽しんで貰おうという、栄区役所の思い入れが感じられる内容でした。

『まちに花を/心に花を/未来に向けて花サクサカエ』の標語は、丹精こめて手入れをする人、花をみて元気をいただく人、それぞれに励みとなる素敵な言葉だと思います。

いたち川の草花の探索は、両日、終盤のスケジュールで本郷車庫バス停前の「桜井の水辺」から「尾月あじさいロード」経由天神橋、栄区役所のコースです。

いたち川 OTASUKE 隊の3名が案内に参加しました。今回直前に、散策区間の草花40種類を撮影し植物名を付し、資料を配布のうえ解説を行いました。

いたち川にこんなに多くの草花のほか樹木があること、昆虫や鳥など動物、そのほか水辺の生き物と「生物多様性」についての広い話に、みなさんが納得のようでした。

栄区オープンガーデン花めぐりツアーに、区内外から多くのお客様がお見えになり、とても楽しいひとときでした。(うめおきな)

読者からのたより

○鎌倉街道が続く道、出立川で身仕度整えて《いざ鎌倉》へと向かい、この時代からきたのが、いたち川になった説、帰陣の祝いをして鎌倉に入ったので帰り橋から～海里橋又戦時中はいたち川を堀の役目とさせて海軍と村里を結ぶ橋として名前がついた説等…その時代により説も変わって行く歴史を振り返る事で、その時代を思いはせます、地名や橋の名前の由来や、伝説のあるお寺さん等ロマンがありますので是非紹介を…楽しみにしています。 茅ヶ崎市 Mさん

○上郷小学校の総合学習の記事を興味深く読みました。川が近い学校には、同じような学習を取り入れて欲しいと思います。



川の魅力も川の怖さも知ることができるでしょう。

大岡川は残念ながら大人がゴミを捨て、子どもたちがそれを清掃し、「川にゴミを捨てないで」というマナーポスターを描くという恥ずかしい状況が見られます。 南区 Uさん

☆初秋のウォーキング募集☆ “秋の野草”の観察

秋のいたち川沿いには、いろいろ野草を観察できます。上流部の瀬上沢には、ミゾソバやタデ類から希少種タコノアシ、ワレモコウなど、森に入ると添付の写真アキノタムラソウを観察できます。

日時:平成29年10月17日(火)
10:00(集合)～13:00(解散予定)
本郷車庫(バス停)→瀬上沢小川アメニティ→池の下広場→瀬上市民の森→道場広場(昼食)→栄高校入り口→本郷車庫(バス停)解散
*雨天中止。中止の場合は、前日ご連絡します。

集合場所:本郷バス停
参加費:100円(保険料等)
持ち物:飲み物、昼食、雨具
参加人数:20名(先着順)
参加要領:参加希望者は、葉書、メール、FAXで住所・氏名・性別・電話番号を明記の上、平成29年9月28日(金)までに下記に応募して下さい。(当日消印有効)
応募先:〒247-0005 栄区桂町303-19
(電話)894-8161 (FAX)894-9127
(アドレス)sa-kikaku@city.yokohama.jp
栄区役所区政推進課企画調整係担当



※内容については、和久井(いたち川 OTASUKE 隊、080-3498-0552)まで

発行年月
2017年7月

通刊 76 号

発行:狹川 OTASUKE 隊 (いたちがわおたすけたい)

OTASUKE 隊事務局:栄区役所区政推進課企画調整係
〒247-0005 横浜市栄区桂町303-19
TEL 045-894-8161 FAX 045-894-9127
栄土木事務所下水道・公園係
〒247-0007 横浜市栄区小菅ヶ谷1-6-1
TEL 045-895-1411 FAX 045-895-1421
(お便り・お問い合わせは こちらまで)

初版「いたち川情報マップ」の紹介 第5弾!!

平成8年(今から21年前)に初版

「いたち川情報マップ」発行!

いたちかわらばん 71号から順次紹介しています



生物

とても微妙な川の自然のしくみ

いたち川に、たくさんの命が戻ってきているようです。

生き物はすべて、食べる食べられる関係を通じた

連鎖のバランスのうえで生き、子孫を残し、そして

死んで分解されて土や養分になり、次の世代の生き物を支えています。

藻や水草→分解者となる菌類などが基本的なサイクルですが、雑食性の魚なども多く、さまざまな関係が複雑につながっています。

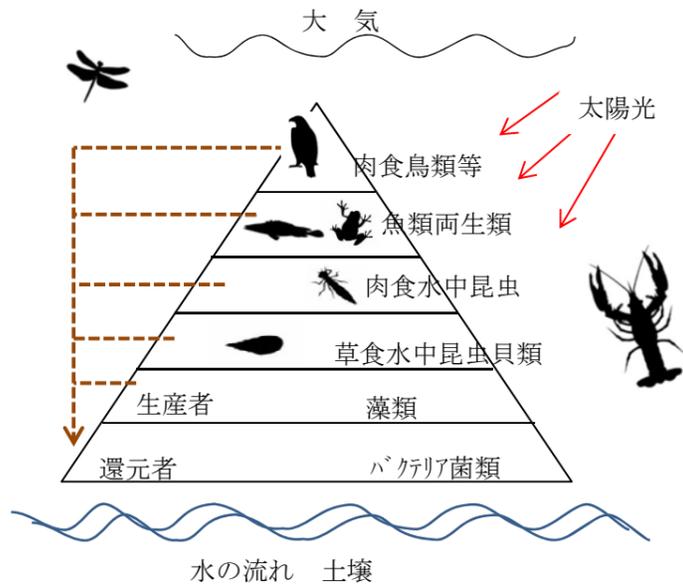
いたち川流域では、こうした食物連鎖の

上の方に立つアオサギやゴイサギ、アオバズク、イタチなども見られるようになりました。

底辺が広がれば頂点も上がり多様な生き物が棲める環境になります。

中間部の魚、トンボのヤゴが減ると水に含まれる有機物を餌とするプランクトンが死骸となって川底にヘドロとして堆積され、水質汚濁の原因となります。

川の生態系と食物連鎖のモデル



エサとなる生物がふえる…その生物は増加していく
 自分を食べる生物がふえる…その生物は減少していく
 エサとなる生物が減る…その生物は減少していく
 自分を食べる生物が減る…その生物は増加していく
 あまりに大きな環境破壊だったときや、人間によって
 新しい種類の生物が持ち込まれたとき、ある動物のみ
 を大量に殺したときは、もとにもどらないときもあります。

◆水辺は変わりつづける自然

水の動きに絶えずさらされている川や水辺は、特に変わりやすい自然です。

水の力は思いのほか大きく、水の増減や淵や瀬のかたちが変わります。また、池に落ち葉が積ると水底の環境が変わりますし、湿地も生える植物がどんどん移り変わっていきます。そうするとそこを生活や餌とりの場、避難場所にしてすみ分けていた生き物たちも変わっていきます。

生き物にとっては、ときどき増水したりしてかく乱されることも必要で、淵が掘られたり、水底の古い藻がはがれたりして環境が改善されます。ときどき水をかぶるような不安定な場所でしか生きられない植物もあり、これが河川特有の植物といえます。

条件の異なる多様な場所と、適度の変動が生き物を豊かにするのです。

◆影のある流れ

さらに、川の生き物のために注目したいのは、川辺の樹木です。プロムナードとして整備され開けた明るい水面だけでなく、樹木がおおいかがさる影のある水面も必要です。

谷戸を流れる水路は、片側が開けた水田、一方が斜面の林で、明るい場所と影の場所の境目にありました。こうした環境の移行する部分は、生き物の育む場としてよい条件を備えていたといえます。

いたち川流域には、荒井沢市民の森、瀬上市民の森は横浜市内でも代表的な谷戸として有名で、動植物の種類も多く、ホタルの発生数が多いことで知られています。

次号では川における帰化植物や外来生物との関わりあい
 を紹介していきます。
 (水・人・子)

いたち川の特徴と生態系

夏の川は勢いよく繁った草木、その中に見え隠れする鳥や昆虫、泳ぎまわる魚や水中の小さな生き物たちで活気があふれています。

いたち川の特徴は、他の都市河川に比べて、川岸を含めて植物の種類が多くみられることと繁茂している場所が多く確保されていることです。これらの要因となったのは、いたち川を管理する土木事務所が10数年前から河川にすむ魚類や水生昆虫がすみやすい環境にしたことよって保護されていることが大きな要因となっています。

生き物は食物連鎖で繋がりが、生態系の中で命の循環を続けています。一般的に雑草と言われて厄介なもの扱いされる草も、昆虫にとっては大切な食物でそれがなければ生存できないという役目があります。

昆虫の中にも肉食(捕食)や草食、何でも食べる雑食と多様な種類があります。

それぞれの昆虫は、固有の植物に卵を産み付け、幼虫時にはそれを食草としていることが解っています。キャベツ等アブラナ科だけを好むモンシロチョウ、またイネ、ススキにはイチモンジセリ、道端に小さな黄色の花を咲かせるカタバミにはヤマトシジミ、草木に覆いついて厄介者のクズにはウラギンシジミ等の幼虫が宿っています。

卵を産み付け食草とする昆虫

- イラクサ…アカタテハ
- イネ、カヤ…イチモンジセセリ
- クズ、マメ科…ウラギンシジミ、モンキチョウ
- カナムグラ…キタテハ
- カタバミ…ヤマトシジミ
- スイパ…ベニシジミ
- クスノキ…アオスジアゲハ
- エノキ…オオムラサキ、ゴマダラ
- ネムノキ…キチョウ
- サルトリイバラ…ルリタテハ
- カラスザンショウ…クロアゲハ
- コクサギ…モンキアゲハ

成虫になって樹液や花粉、蜜を求めて集まる昆虫は、クヌギ類には甲虫類のカブトムシやクワガタ類、セリ、クレソンにはスジクロシロチョウ、菜の花にもミツバチ、ハナアブなどが集まってきましたが、なぜその植物を選ぶのか具体的な理由は長い間謎に包まれていましたが、今日では科学的に解明されつつあるようです。

食べる側の生き物は必要な栄養を取ると共に、体に悪い物質を取り込まないように餌を選ぶ必要があります。

食べられる植物側としても、様々な方法で防御策をとって食べられないようにしている一方、花粉を運んでもらったり、受粉を手伝ってもらったりの相互扶助の役割も保つて、「蓼(タデ) 食う虫も好き好き」と例えられるように複雑に絡み合った生態系の中でバランスよく生き続けているのです。

自然の生態系のバランスが崩れると、底部に位置する河川への影響は大きく、水の自浄作用が低下し水質汚濁にもつながってしまいます。

河川沿いに植樹された樹木は防災の役目のほか甲虫類の繁殖場所ともなっているため、甲虫類が好きな子供たちを川辺にいざない、結果的に河川への興味を深めていくことを期待しています。河川域内で動植物を鑑賞できることは、エコシティー(環境共生都市)の中の良きモデルと言えるのではないのでしょうか。

(うぐいす)